

# 外国語教育における第1言語の効果的使用

—OISE University of Toronto TEFL資格コースによる  
「児童への英語教授法」に基づいて—

檜殿 伴子

## SUMMARY

In this paper, I introduce what I studied from a TEFL Certificate course of OISE University of Toronto, especially concerning “the Teaching English to Young Learners.” The effective use of L1 that the course teaches may be considered significant when it comes to the role of the native Japanese teachers in the EFL classes.

## 1. はじめに

今日、グローバル化への流れから、英語教育のニーズが高まるとともに、英語教師の需要も拡大している。日本の学校教育においても英語が小学校教育に必修科目として導入されるに伴い、小学校での英語教員の増員と養成が行政の主導のもとで急速に推進されている。英語教師になりうる資格には、TEFL (Teaching English as a Foreign Language)、TESL (Teaching English as a Second Language)、TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages)、CELTA (Certificate in English Language Teaching to Adults) などが挙げられる<sup>(1)</sup>。筆者が目にするだけでも、日本の高等教育機関を含む公募情報を掲載するJREC-In Portal (科学技術振興機構 <https://jrecin.jst.go.jp>)においても、英語教育に従事するためにこれらの英語教師認定資格証明を要求する求人も少なからずある。本稿では、トロント大学TEFL資格オンラインコース(University of Toronto Faculty of Education TEFL Online)に「おける外国人児童への英語教授法」(Teaching English to Young Learners)<sup>(2)</sup>を取り上げる(以下、TEYL)。このコースは、トロント大学が英語教師資格認定に携わるグローバル企業であるティーチ・アウェイ (Teach Away)<sup>(3)</sup>と提携して行っている事業である。本稿で取り上げる「外国人児童への英語教授法」は日本をはじめとしてEFL (English as a Foreign Language) の国々で英語教育に従事するネイティブ・スピーカーが“Young Learners”、つまり、7歳から12歳くらいまでの年齢の児童を対象とした英語教育に携わるときに身につけるべき知識と心得であり、小学校における英語教育への指針となる。その教授法は、特に、その年齢層を対象としたときの教師の果たす役割と児童との関係構築について説くと同時に、その年齢層に限らず、広く一般的に学習と学びについての洞察と示唆に富んでいる。何がひとを支

え、何がひとを生かさせるのか、援けとは何かという問いにもこたえうるものである。本稿では、TEYLの教授法から以下の4点を取り挙げ抄訳しながら以下の点について解説する。(1)教室での信頼関係の構築、(2)児童をやる気にさせる教師の技術、(3)教師中心と児童中心の手法、(4)ESLとEFLの違いに基づく教室での第1言語の使用の4つである<sup>(4)</sup>。とくに、外国語教育現場での第1言語の使用については多文化共生の理念から、言語と文化に優劣を設けないということの実践である。

## 2. 教室での信頼関係の構築

TEYLはハンガリーの研究者マリアン・ニコロフ（Marianne Nokolov）の研究によるものとして、「英語を継続して使用し勉強している学生たちは小学校で受けた英語教育の経験を高く積極的に評価し、児童が英語が好きになる理由に、英語の先生が好きだからということがある」<sup>(5)</sup>と指摘している。さらに、「学生は小学校での英語教育の導入を積極的に評価し、小学校で受けた英語教育の経験がその後の英語学習に大きな影響を与える。ゆえに、教師の果たす役割が甚大であるということは明白である」<sup>(6)</sup>と指摘している。

TEYLによると、長年の研究の示すところとして、児童にとっていずれの言語であれ、児童が聞きなれない言語環境にさらされた時に児童の学習環境に重大な影響を与え、児童の学習を最大限に高めるのは教師との信頼関係、そして児童同士との友好関係であるとする<sup>(7)</sup>。教師が児童をケアし支援する関係（caring and supportive relationship）を構築することが肝要であると説く<sup>(8)</sup>。ケアを施すことで、教室が児童にとって安心して学べる空間を提供することになるからだ。それによって、児童が新しい言語に対してリスクを冒して（risk taking）学ぶ意欲を起こさせる環境を整えることになると説く<sup>(9)</sup>。

とくに、教師と児童が温かい信頼関係を構築するためには、教師が児童をケアし、児童の話に傾聴し、尊敬と配慮を払って児童を扱わなければならないと指摘している<sup>(10)</sup>。また、「教師が児童個々の興味、関心、強みに配慮した柔軟な授業計画を立てて臨むとき、児童は活動的に学ぶことに参加する」<sup>(11)</sup>と言う。さらに、教室での児童同士の友好的関係づくりについても教師の果たす役割は重大であるという。

TEYLは児童をサポートするためにはまず児童一人ずつについてよく知ることが大切だと言う。児童のニーズを知ること、彼らは何ができるのか、何に興味を持っているのか、どんな技能があるのかを知ること、それを英語のクラスで活用することを説いている<sup>(12)</sup>。

児童同士の関係は児童の学習環境と学習の発展に重大な影響を及ぼすため、児童がグループ活動に従事する際には教師はファシリテーター（facilitator）として、児童がお互いから学びあえるような関係づくりの構築に努めなければならないと説く<sup>(13)</sup>。

とくに、児童同士が話し合う機会を持つことをTEYLは推奨する。児童が教室で互いに話

すことがお互いの学習を助け、互いの学習を省みる機会を得て、互いの理解を伝達し合うことを通じて、学びを促進すると説く。児童同士がお互いに学び合う環境を整えることが大切だとしている<sup>(14)</sup>。活動に従事させるにはどうすればいいかについても説いており、まず、生徒の不安を取り去る工夫をすることが必要だとする。「まず、自分で考え、ペアで話し合い、クラス全体で考えを共有するストラテジー」(“a think-pair-share-strategy”)を提案している。児童に「仲間」(“Buddies”)を持たせ、「仲間」によるグループワークを推奨している。教師が質問した後、時間を取って、まず、自分で学生に考えさせる。それから、学生同士で話し合わせ、意見を共有し、それから、クラス全体で答えをつくる。このやり方は不安感をやわらげるとする<sup>(15)</sup>。

このように、TEYLでは、「英語」という教科において、まず、教室での人間同士の営みに着目していることが理解できる。学習の土台が教室での人間関係の構築から始まるというわけである。教室での人間関係は教師と児童、児童と児童の2つあり、それぞれの関係づくりが学習の土台となると説いている。その関係は信頼と友好が絆となっている関係であり、それを絆としてお互いに学び、教えあえる人間関係の構築を肝要とする姿勢が明らかである。

### 3. 児童をやる気にさせる教師の技術

児童がどんなときに活動的に学び、新しいことに取り組むのかについて、TEYLは児童の動機を強調する。児童本人がその物事に興味があり、やる気を起こしたときに最もよく学ぶと観察し、学習を活動的な過程(“Learning is as an active process”)として位置付け、児童の活動が促進するときの4つの場面・状況を挙げている。一つ目は、児童が課題を解決する際、課題を発見する際に児童の言語活動・言語能力が発展・発達すると説く。二つ目は、児童が意欲を起こしたとき、新しいことに楽しく取り組み、児童同士あるいは教師との間で交わされる会話の中でアイデアを見つけて実践・実験してみようとする。第三に、言語能力の発達は決して紙の上では起こらないと強調している。重複するようだが、課題解決のとき、探求するとき、伝達するときに言語能力が発達すると説く。そのような場面でこそ児童は言語を実際に使用し運用する。第四には、児童は遊びや探索を通じて、また、物事について他のひとと話す機会を得たとき、よく学ぶと説いている。そして、話すことと探求は大抵同時に起こるとしている<sup>(16)</sup>。

では、TEYLは実際に授業を行う教師が直面する問題として、上記の状況の反対の場合を想定する。児童が話さないときにどうするかという問題である。そのとき、教師の技術力が問われる。TEYLは生徒を励まして生徒が話すようにするための教師へのアドバイスを与える<sup>(17)</sup>。まず、TEYLは7項目の質問を教師に発する。その7項目を自問した後で、それぞれ進むべき具体的な16の解決策を提示する。7項目とは、(1)「授業が本人の言語レベルに合っていないため、生徒が恥ずかしがって話そうとしないのか」。(2)「教師が生徒より話しすぎて、

授業中、大抵教師だけが話しているのか」。(3)「生徒が答えるための手段として、挙手だけが許されているのか」。(4)「正確に話すことを要求しすぎているため、生徒が間違いを犯すのを恐れているのか」。(5)「発話の要求レベルが児童のレベルに合っているのか」。(6)「生徒が話題や会話のパートナーに退屈したり飽きたりしているのか」。(7)「生徒に言語を使ってみようとする意欲ややる気があるか」。これら7項目を自身に問い掛けた後、次の16の解決策にとり組むよう提案されている：(1)「生徒に考える時間を持たせること。児童が考えるのを待つこと。児童には課題や質問について考える時間が必要であり、児童が話す前にこの時間を取ることが肝要である」(“Think Time/ Wait Time”)と説明している。(2)「教師が児童に話題や課題を与えて、生徒に考えさせ、ペアを組ませて他の生徒と考えたことについて話し合わせ、彼らの意見をクラスで共有させること」(“Think-Pair-Share”)。(3)「生徒が話しているとき、間違いの指摘は理解を妨げるときだけにするのが原則。なんとかこうにか伝達できている限りはよしとすること」(“Focus on Understanding”)。(4)「大人も子どもも同様に体を動かすことは脳の活性化によい。従って、もしも生徒がやや無気力な感じになれば、体を動かす活動を授業に取り入れるとよい。立たせてみたり、席替えをしてパートナーを換えたりすることでよいこと」(“TPR-Total Physical Response”)。(5)「ペア・ワークをするとき、しゅっ中パートナーを換えて、いつも同じ相手と組まないようにすること。また、課題もペア・ワーク、グループ・ワーク、クラス全体でする、教師とするなど、様々な形態を混合させること。「はい」「いいえ」で答えるだけの質問ではなく、話しや会話を持続させることが大切である」(“Switch Groupings Often”)。(6)「生徒が話そうとする努力をほめること。普段話しながらないような児童が話すときはとくにほめること。どんなささいなことでもクラスへの寄与や貢献をほめること」(“Praise Praise Praise!”)。(7)「教師自身の話す時間に気を払い、生徒が話す時間を犠牲にしてまで自分ばかり話さないこと。生徒の聴解力を増進させるような質の高いインプットをすることはとても大事だが、喋りすぎて時間を使ってしまうようにバランスをとって話すこと」(“Talk Little, Listen Much”)。(8)「教師自身が精巧な会話技術を備えて、生徒にたくさん質問を投げかけ、クラスでの会話を持続させ、生徒の応答を注意深く傾聴し、生徒の答えに基づいて質問を発することができること」(“The Art of Good Conversation”)。(9)「初級レベルの生徒がまだ自分自身で英文を作れないときは、クラス全体でのコーラスでの応答練習を取り入れること。大抵の場合、教師の言ったことや、生徒が読んだ教科書の文や会話をクラス全体で復唱させたりすることである。この技術は生徒のレベルが低いときにはたくさん話す練習になり、特に大人数のクラスで有効である」(“Choral Response”)。(10)「常に教師自身が自分の英語を計ること。「計る」とはESLの学習者にとって解りやすいかどうかを計ることである。ゆっくり話すこと。必要最低限・最短の英文で的確に何をすべきかを説明すること。素早く板書し、教師の指示や話が視覚的に見えて、読めてわかるようにすること。学習者のレベ

ルに合った相応しい言葉づかいをし、言葉を選ぶこと」(“Give Clear Instructions”)。(11)「生徒に質問への答え方をはっきりと示すこと。教師自身がやってみせて、生徒に真似させたり、答え方の見本を板書して示すこと」(“Be a Good Model”)。(12)「教材を工夫すること。単に教科書に載っている活動集に依存するのではなく、質問カードや、ロール・プレイゲームカードや、絵や、話すためのゲーム教材や視覚教材など、それを使って生徒が話せる教材を自分で見つけてクラスに持ってくること」(“Use Interesting Materials”)。(13)「生徒をやる気にさせるには、話さなければ絶対に結果が出ないような活動を選ぶこと。たとえばインフォメーション・ギャップ・タスクをさせて、情報の穴埋めをさせたり、マップ・アクティビティをさせて情報を伝え聞き取って、地図で場所を見つけたり、ロール・プレイをさせたりといった課題を課すこと」(いずれも、情報を伝え、聞き取るためのコミュニケーションを必要とする) (“Try Task-Based Activities”)。(14)「生徒が興味を持っている話題を選ぶこと。そのためにまず生徒をよく知ることが大事。そして、ニーズ・アナリシスをして、その生徒に最も関連する話題を選ぶこと。生徒のニーズを知るために、授業の最初に質問票・アンケートを配布したり、生徒自身に話題を選択させたりしてもよいこと」(“Choose the right Topics”)。(15)「生徒全員が教室を快適に感じ、歓迎されているという雰囲気作りをすること。着席プランや、部屋の温度、いじめなど、どんなことでも生徒に不安や不快感を起す問題について素早く対処すること」(“Create a Friendly Environment”)。(16)「母語で話すことも多くの場面で許可すること。言語能力が強い生徒、反対に弱い生徒の間では、母語で話し合いが活性化することがある。まず、自分の母語で議論できるかどうかを肝心。この活動は話題・課題の理解を促進させ、かつ、母語も発達させることとなる」(“Talk in Native Tongue”)。

このように、TEYLは話さない生徒を前にしていかに対処するのかについて具体的な対処法を与えている。試行錯誤する教師像がある。話さない生徒に非があるのではなく、生徒のやる気を引き出し、活動させるための教師自身の技量が問題となっている。教師自身が様々な工夫しアイデアを凝らして生徒を話させるためにはどうしたいか常に自問し最良の解決策をその場で生み出していかなければならないということ、教師自身が解決策のいろいろな引き出しを持っていること、そのような教師の技術力が問われていると理解できる。また、よりよい理解のためには母語の使用を促すことも注目できる。肝心なのはどれだけ内容を理解できたかであるからであり、母語のできる能力はそのまま第二言語に転化可能であるという確信もここでは示されている<sup>(18)</sup>。

#### 4. 教師中心と児童中心の手法

子どもはどのように学ぶのかを知れば、最も効果的に子どもに教えることができるとTEYLは説く<sup>(19)</sup>。TEYLによると、子どもに教えるためのアプローチはたくさんあるという。

TEYLはまず一つ一つが対立する概念から構成される3つの手法を紹介する：(1)「新しい言語は、まず教師中心で注入・インプットし、子ども中心で練習する」(“Teacher centered versus Child centered”)手法；(2)「友好的でリラックスした雰囲気子どもに話させた後で、権威的な方法で子どもを統御・統制するように切り替える」(“Friendly and relaxed atmosphere versus Controlling and authoritative atmosphere”)手法；(3)「子どもに実験させ間違いを経験させた後で、正誤のはっきりしたテストをして評価する」(“Experiments versus Tests”)手法の3つであるが、大切なのは、子どもの学習を支えるアプローチに一貫性(consistency)があることだと指摘している<sup>(20)</sup>。中でも確立されたアプローチとしてTEYLが提唱するのが第1番目の「教師中心のアプローチと子ども中心のアプローチ」であり<sup>(21)</sup>、それぞれの特徴が説明されている。前者に6つの特徴が挙げられている：(1)教師の統御・統制、(2)教師への受動的応答、(3)教師の指導案と段階ごとの指示に従うこと、(4)ドリル・機械的反復、(5)成功を鍵とし失敗を回避すること。(6)成功への賞賛・褒美の6つである<sup>(22)</sup>。後者の特徴としては、(1)「共同作業・チームワーク」。(2)「学習の結果ではなく、学習の過程に焦点を当てること」。(3)「子ども自身の選択・子どものペースで進むこと」。(4)「学習への動機が外的な報酬から来るのではなく、子ども自身から来ること」。(5)「英語は個別的な文法に分けてではなく、自然な文脈で学ぶことに強調を置くこと」。(6)「教師は、ファシリテーターとして、生徒を勇気付けて、自然な形で学ぶようにさせる」こと。(7)個々の児童は活動的な学習者として英語の世界と彼らにとって意味のあることを探検すること。(8)「間違いについてはさらに深く考える機会としてみること」である<sup>(23)</sup>。

TEYLはこれら二つのアプローチのうち、どちらが成功するかを暗示的な2つの例によって示す。

(例1)：ある日、母親が役に立つ教育用のソフトウェアを娘のために購入しコンピューターにインストールして、娘にどうやって使うかを教えた。最初、娘は面白がってやっていたが、母親が仕事で外に出てしまうと、そのプログラムを閉じて、いつもやっている大好きなコンピューターゲームに切り替えてしまった<sup>(24)</sup>。

(例2)ある日、女の子がコンピューター上でたまたま教育用ゲームソフトを見つけて、欲しいと思った。教育用だが、ゲームになっていて、とても面白そうだった。そこでどうしても欲しいと両親に頼もうと思った。だが、そのソフトウェアはとても高い。きっと両親に反対されるだろうと思い、どうやったら買ってくれるか思案した。そこで彼女が考えたのは、自分のお小遣いを貯金して自分で買うことだった。両親は娘の願いに最初はためらったが、折れて承諾した。そして、ついに彼女はその教育用ゲームソフトを手にした。やってみると、想像以上に難しい。最初は間違いだらけだったが、何度も格闘しているうちに、徐々にうまくなり、そのゲームの複雑な仕組みや新たな挑戦に果敢に取り組み、ハードシップを乗り越え、道を切り

開き、レベルアップしていった。と、ふと、まだ使ったことのない別の教育用ソフトウェアがあることも思い出した。そうだ、やってみよう。彼女はすでに挑戦モードになっていた。やってみると、またもや難しい。どうすべきか。と、それらのソフトウェア同士の類似性に気づいた。そうだ、やってみよう。この発見をもとに、彼女は実験してみることにした。自分で買ったソフトウェアで取り組んだときの経験と技術を用いて、新たなソフトウェア上で応用してみることにしたのだ。あ！これでいいんだ！うまくいった！そう、最初は難しかった。でも今では、できるようになり、堅調に進歩し、レベルを上げている<sup>(25)</sup>。

TEYLの解説では、第2の例が明らかに成功的な学びの例であり、これが子ども中心のアプローチであるとする<sup>(26)</sup>。第1の例は、親主導型、第2の例では子ども主導型であり、明らかに後者の例によって、子どもは主体的によりよく学ぶことが示されている。しかし、教師中心を決して退けない。TEYLはこの2つのアプローチをバランスよく組み合わせることを推奨している<sup>(27)</sup>。ここで子ども中心のアプローチについてTEYLは子どもと一緒に作業をするということだけが子供中心なのではなく、むしろ、それは、教師中心の指導法であると注意を喚起しちている。なぜなら、こどもたちは単純に教師の指示通りにやれと言われた作業と一緒にしているだけのこともかもしれないと指摘している<sup>(28)</sup>。

子どもはどのように学ぶのか。どんなときにその学びがすすむのか。子どもが学びの場所へいざなわれるのはどんなことが契機となるのか。どんなときに「わかり」が生まれるのか。どんなときに学習への意欲がかきたてられるのか。また、どんなときにその意欲が失われるのか。なにが子どもを学習へと向かわせるのか。TEYLは、まずこのような問いかけをすることからこそよりよい指導法が生まれると説いていると思われる。

## 5. EFLとESLの子どもの違い：第1言語の活用

TEYLはEFLの子どもとESLの子どもの違いと、その違いに基づいて、とくにEFLの子どもへの英語教育に求められる重要な点を4つ挙げている。まず、ESLの子どもは友達をついたり、学校や文化に適応するために英語を学んでおり、英語以外の教科も英語で学び、校外でも英語を使用するのに対し、EFLでは英語の実用性、ニーズに欠け、運用できる場所も欠いている。EFLの生徒は英語学習への内的動機を欠いており、またEFLの生徒は教師に過大に依存する傾向があると指摘している<sup>(29)</sup>。日本の英語教育の現場はEFLであって、ESLではない。「なぜ英語を学ぶの？」と生徒に問いかける教師たち、それにどう答えていくのかについて『英語教育』<sup>(30)</sup>で議論されているように、なぜ英語を学ぶのかわからない状況で、ただ英語嫌いになっていく生徒が山積みになっている現場がある。また、小学校において、まず英語嫌いをなくすために導入された「楽しさ」とその「中身」について熟考している<sup>(31)</sup>。

TEYLが指摘する、EFLの子どもへの英語教育に求められる重要な4点とは(1)「EFL教師

の役割の重要性」(“Critical role of the EFL Teacher”)、(2)「沈黙期を尊重すること」(“Respecting the Silent Period”)、(3)「第1言語の使用」、(4)「ナチュラル・アプローチ（自然な推移による言語習得方法）」(“Natural approach”)である<sup>(32)</sup>。まず、一つ目の「教師の役割の重要性」については、教師が発音をはじめとしてや児童の英語の源泉となることを自覚することと説く。児童には教師及び他の生徒とインターアクションの機会が必要であること。教師はどのように子どもが初期の言語産出する足場(“scaffold”)をつくれるかについて考え、子どもがお互いに言語を意味のあるものとして使えるように励ます必要があると説明している<sup>(33)</sup>。(2)「第1言語の活用」については、TEYLは翻訳作業の有効性を説き、「活動的翻訳」(“Active Translation”)と名付けている。TEYLは母語・第一言語(L1)を使用することに肯定的であり、第1言語(日本人の子どもにとっては日本語)の使用を有効に活用することを勧めている。最初、教師の意向にかかわらず、生徒は母国語でどうなのか気にし、翻訳したが、この翻訳作業への傾向は、外国語学習で起こるごく自然な過程であるとし、TEYLは母語への翻訳作業を決して否定しない。むしろ、それを外国語学習で起こるごく自然な過程として肯定し、これを有効的に活用することを勧めている<sup>(34)</sup>。英単語や文章を母国語に翻訳させて文脈を理解させることは有効だと説く。よりよい理解のための「道具」として母国語を活用し、かつ、できるだけ多くの時間、授業中に英語を聴かせ、使うようにすることが必要だとしている<sup>(35)</sup>。(3)教師は学習者の「沈黙期」を忍耐強く見守るべきだと説く。子どもは会話を聞き、観察していき、この期間に生徒は言語への確信を蓄積し、熟達するという。この時期に、たとえどれだけ生徒が理解しているのか知り得ないとしても、教師は子どもが話すのに抵抗なく感じるまで時間を与え、忍耐強く待つことを教師に求めている。子どもは他の子どもや教師と関われば関わるほどより円滑に沈黙期から移行すると説明している<sup>(36)</sup>。(4)TEYLはこの「沈黙期」から移行するのを手助けする方法として「ナチュラル・アプローチ」を提唱している。TEYLはたとえば、クラスメートについて知ることという課題をさせたとき発達段階に応じてどのように授業を展開するか教授している。発達を前段階(“Pre-communication”)、初期(“Beginning”)、進展期(Advanced)に分け、前期では絵を使用して丸をさせるなどの仕方で回答を引き出し、初期では、「はい」「いいえ」といった単純な応答を用い、進展期には生徒から多くの情報や説明を引き出すようにし、また、生徒自身にコミュニケーションの仕方や質問の仕方を選ばせるという。また、全段階(“All stages”)にわたって、文法事項の誤りは指摘せず、目標は理解するために行われるコミュニケーションをサポートすることだとする<sup>(37)</sup>。

この中でも第1言語の使用を積極的に活用するとの教示に注目したい。「今までに持っている知識を活性化させること」(“Activate Prior Knowledge”)を推奨している。英語で物語の聞き取りやビデオを視聴するという課題に取り組む際には、まず、第1言語でトピックについて論議することをすすめている。また児童に質問を投げかけて、以前に取りくんだ教材を思い

出させたり、キーワードを発して生徒に考えさせて授業を展開していくことを説いている<sup>(38)</sup>。

トロント大学のTEFL講座は言語や文化に優劣を設けない。自国の文化や言語を捨てて英語を取れとは決して言わない。「EFLクラスの学生が知らなければならないのは、新しい学習言語の英語と自分たちの言語と文化にバランスを取ることである。我々は学生たちが言語や文化にヒエラルキーがあると考えてほしくない。英語についてのどんな新しい学習でも、自分たち自身の言語と文化と共存しなければならない。言い換えれば、学生たちは一度に数多くの対話を並行して持つことができ、どんなアイデンティティーも失ってはならないのだ」と宣言している<sup>(39)</sup>。異文化が共生・共存する考えを強く打ち出しているのである。

「効果的なクラス運営」(“Effective Class Management”)について、その目的は素行の悪い生徒への対処を考えることではなく、教師の授業準備がよければ、生徒の素行不良は起きないと断言する。教師の素行が生徒の授業態度に影響すると説き、「教師自身が感情を統御できないとき、どうして児童ができるのか」と問う。生徒はモデルを必要としており、教師は生徒のモデルとして振舞うべきだと説いている<sup>(40)</sup>。このように、TEYLは教師の役割の重要性を繰り返し強調し言及している。

## 6. まとめ

以上まとめると、TEYLは、児童の学習支援者としての教師像を強く打ち出している。そして、教師がどのように生徒を支援できるのかの方法を様々に説いている。児童にやる気を起こさせる技術力が児童を英語習得に向かわせる要となり、教師の技術力を問うている。学習の目的としては児童の理解に焦点が当てられている。コミュニケーションの目的は理解にあり、教師は児童がそれぞれの段階で彼らの理解を示すことが可能な方法を考案し提示していくことの大切さを教えている。児童のそれぞれのレベルでの自己表現の仕方をサポートすることが教師の大きな役割であると説いていると思われる。言語の別に焦点を当てるのではなく、内容への理解に焦点を当てることによって、第1言語の使用が理解の助けになるならば、それを活用することを積極的に評価している。第1言語を使って、脳が活性化されるならば、むしろ有効的にそれを活用すべきだというのは妥当である。上記にもあったように、TEYLは議論や討論も、まず第1言語でできるのかどうかを問題としている。児童がその時期その時期に自分の理解・意志を伝えられる方法を常に模索することを促している。それは絵によってもいいし、第1言語の日本語であってもいい。児童一人一人をよく観察し、その子にとって意志疎通の可能な方法は何なのかを教師が不断に見続け、児童の成長を見守り、忍耐強く待つことを説いている。このことは、日本語を理解できる教師の存在意義を強化することとなる。児童の日本語による発話を理解できる教師の存在は児童が安心して学べる環境づくりに寄与することとなり得る。また、このことは、「オールイングリッシュ」へ警笛を鳴らすこととも受け取れるであろう。

英語による金縛りを進めるのではなく、生徒の理解力を高める方法が模索することが教師に求められているからである。そのときに、学習者の第一言語を積極的に授業内で活用する方法が説かれている。結局は、英語の授業においても学校教育で目指すべきことは、生徒の学習能力が高まる場でなければならないからだ。生徒を教師は常に児童が話しやすい雰囲気をつくることを心がけることが肝要である。さらに、児童は児童からよりよく学ぶと TEYL は説く。そのためにグループワークを推奨し、児童が「仲間」同士学びあえるように配慮することを強調している。教師側のインプットと児童側のアウトプットのバランスを考慮し、サポーターとして教師が自覚し、常に教師側の自己省察を促している。児童をサポートするために児童同士の仲間と、児童を支えるための足場をつくることを通して、教師はいかに戦略的に児童の学習を援助できるかが教師の技術力として問われているといえる。

また、この外国語教授法は生涯教育にも応用できるであろう。ひとはなぜ学ぶのか、どのように学ぶのか、ひとを学びへと誘う要因についての示唆に富んでいるからだ。

## 注

- (1) これらの資格の違いは、ティーチ・アウェイ (Teachaway) の定義によると、TEFL はネイティブ・スピーカーが、英語を第一言語としない海外の国々で英語教育に携わるときに使われる英語教師資格である。つまり、ネイティブ・スピーカーが日本で英語を教授する場合はこの資格が有効となる。  
<https://www.teachaway.com/tefl-certification/tefl-vs-tesl-vs-tesol> 2017年12月24日 検索。
- (2) OISE University of Toronto, Ontario Institute For Studies in Education (<http://teflsupport.teachaway.com/home> 2017年12月24日 検索。この TEFL プログラムの著者はプログラム・コーディネーターの Siouga, Ero を始めとするメンバーによって著作されている (<https://teflonline.teachaway.com/online-tefl-designers/> 2018年8月29日 検索)。このコースを紹介していただいた香山恵先生に謝意を表す。
- (3) [https://en.wikipedia.org/wiki/Teach\\_Away](https://en.wikipedia.org/wiki/Teach_Away) 2018年2月20日 検索 ; <https://www.teachaway.com> 2018年2月20日 検索。
- (4) TEYL は10課から成っており、各課は3から4章で構成されている。さらに各章は様々な項目から成り、各項目に見出しがつけられている。本脚注において、引用箇所はそれらの項目の見出しによって示す。
- (5) TEYL, Lesson 2.1: "Motivating Children to Learn" > "Examining a Teachers' Role."
- (6) TEYL, Lesson 2.1: "Motivating Children to Learn" > "Examining a Teachers' Role."
- (7) TEYL, Lesson 1.1: "Learning and Development" > "How do Children Learn?," "Building Relationship."
- (8) TEYL, Lesson 1.1: "Learning and Development" > "How do Children Learn?,"

- (9) TEYL, Lesson 1.1: “Learning and Development” > “Building Relationship.”
- (10) TEYL, Lesson 1.1: TEYL, Lesson 1.1: “Learning and Development” > “Building Relationship.”
- (11) TEYL, Lesson 1.1: TEYL, Lesson 1.1> “Building Relationship.”
- (12) TEYL, Lesson 2.2: “Getting to Know Your Students > English Classes are Beginning.”
- (13) TEYL, Lesson 1.1: TEYL, Lesson 1.1> “Building Relationship.”
- (14) TEYL, Lesson 1.1> “Teacher Talk Time Versus Student Talk Time.”
- (15) TEYL, Lesson 2.3: “Learning Environments” > “A Welcoming Environment,” “Fostering Classroom Engagement.”
- (16) TEYL, 1.1> “Teacher Talk Time Versus Student Talk Time.”
- (17) TEYL, Lesson 1.1> Handouts > “Tips for Encouraging Student Talk.”
- (18) OISE University of Toronto Faculty of Education TEFL Online-Core Curriculum > “Introduction to English Language Teaching (Authored by Gryfe Andrew) > Lesson 6: Principles of Second Language Acquisition Part III > Jim Cummins’ Theory. 第二言語習得理論において、ジム・カミンズ (Jim Cummins) が提唱した “Basic interpersonal communicative skills (BICS)” (基本的な対人コミュニケーションスキル) と “Cognitive/Academic language proficiency (CALP)” (認知学習的言語能力) あるいは「冰山理論」(The Iceberg Theory) としてよく知られている理論 (Cummins 1991) に裏付けされる。その理論では第1言語で育っていない「認知学習的言語能力」(Cognitive Academic Language Ability) は、第2言語でも育つのは難しいとされる。
- (19) TEYL, Lesson 1.2> “How Children Learn.”
- (20) TEYL, Lesson 1.2> “Approaches to Teaching Children.”
- (21) TEYL, Lesson 1.2> “How Children Learn.”
- (22) TEYL, Lesson 1.2> “Teacher Centered Approach.”
- (23) TEYL, Lesson 1.2> “Child Centered Approach.”
- (24) TEYL, Lesson 1.2> “A Mother Tries to Help.”
- (25) TEYL, Lesson 1.2> “A Child Experiences for Herself.”
- (26) TEYL, Lesson 1.2> “A Child Experiences for Herself.” > “Our Response.”
- (27) TEYL, Lesson 1: Quiz > Question 2 の答え。
- (28) TEYL, Lesson 1: Quiz > Question 6 の答え。
- (29) TEYL, Lesson 1.3> “English as a Foreign Language Development.”
- (30) 阿野・太田・荻原・増淵 2018: 10-13.
- (31) 粕谷 2018: 14-15.
- (32) TEYL, Lesson 1.3> “English as a Foreign Language Development.”
- (33) TEYL, Lesson 1.3> “Role of the EFL Teacher.”

- (34) TEYL, Lesson 1.3> “Using the L1.”
- (35) TEYL, Lesson 1.3> “Using the L1.”
- (36) TEYL, Lesson 1.3> “The Silent Period.”
- (37) TEYL, Lesson 1.3> “The Natural Approach.”
- (38) TEYL, Lesson 4.4> “Activate Prior Knowledge.”
- (39) Learner-Centred Lessons, Lesson 1.3> Question 2への答え.
- (40) TEYL, Lesson 2.4: “Classroom Management” > “Effective Classroom Management.”

#### 〈参考文献〉

- Cummins, Jim (1991). “Conversational and academic language proficiency in bilingual context.” AILA Review 8, 75-90.
- Teachaway (<https://www.teachaway.com/tefl-certification/tefl-vs-tesl-vs-tesol>)
- OISE (Ontario Institute For Studies in Education) University of Toronto (<http://teflsupport.teachaway.com/home>).
- Gryfe, Andrew Introduction “Introduction to English Language Teaching.” TEFL, OISE University of Toronto.
- 阿野幸一・太田洋・荻原一郎・増渕素子 (2018) 「[座談会] 新人応援委員会リターンズなぜ英語を学ぶの？ - 私たちはこう答える」『英語教育』66: 12, 10-13.
- 粕谷恭子 (2018) 「小学校編『脱・子どもたまし』のチャンスー経験を通じて本当の楽しさに気づかせる授業を」『英語教育』66: 12, 2018, 14-15.

#### 〈キーワード〉

EFL、小学校、児童、英語教授法、第1言語、OISE University of Toronto